# 自動詞文における格の代換について

## ―「発生」と「移動変化」をめぐって、「あふれる」を中心に―

安　　平　鎬

### 1．はじめに

「あふれる」という動詞は、ニ格名詞句とガ格名詞句が例(1)ａとｂのように、「ＡニＢガ～」から「ＡガＢニ～」と変わっても（語順の変化ではなく）同義性[1]がほぼ保たれる。一方、同じ「あふれる」という動詞を述語とする文であっても、(2)のように(1)とは違う振る舞いを示している例もある。

本論文では、このような構文を代換(hypallage)[2]構文の一つとして捉え、その意味的な特徴である「発生」・「移動変化」という概念に対して検討を加える。

(1)　ａ表情に喜びがあふれる。
　　ｂ表情が喜びにあふれる。
　＊ｃ表情が喜びであふれる。

(2)　ａ目に涙があふれる。
　＊ｂ目が涙にあふれる。
　　ｃ目が涙であふれる。

本稿においての結論は次の二点である。

一、「あふれる」の格構造には、「発生タイプ」と「移動変化タイプ」がある。

二、同じ「あふれる」を述語とする文においても、(1)と(2)のように、「ニ」格の名詞が具象（concrete）名詞の場合は「ＡニＢガ」「ＡガＢデ」代換、抽象（abstract）名詞の場合は「ＡニＢガ」「ＡガＢニ」代換が起こる。

#### 1.1　先行研究

日本語の研究において、このような「代換」現象の指摘は、Kageyama（1980）[3]、奥津（1980）、奥津（1981）が見られる。以下では、奥津（1980、1981）の内容を中心として「自動詞文の代換」について検討していきたい。

##### 1.1.1　奥津（1980）

奥津（1980）[4]では、國廣（1966）[5]が英語の代換について取りあげているのに対し、英語と日本語を比較して幾つかの例を提示している。「自動詞の代換」については立ち入った説明はないが、代換を動詞の自・他対応と関連づけて考えている。

(3)　a ジョンはその卵から小さな雛を孵した。
　　b ジョンはその卵を小さな雛に孵した。
　　c 小さな雛がその卵からかえった（孵った）。
　　d その卵が小さな雛にかえった。

奥津氏は、「孵る・孵す」の場合、(3)a と c、(3)b と d の自・他対応関係から他動詞文に代換関係が認められる場合、対応する自動詞文の主語についても(3)c と d のように代換が存在する、と述べている。

### 1.1.2　奥津（1981）

奥津（1981）[6]では、「塗る」・「飾る」を述語とする文のいわゆる「壁塗り代換（spray paint hypallage）」と、「つまる」「混む」「にじむ」「あふれる」「満ちる」等の自動詞構文の代換現象を取りあげている。

また、このような現象が起こる理由については、これらの動詞を「移動変化動詞」として捉えており、移動変化動詞は、(4)のように「移動動詞」の格の枠と「変化動詞」の格の枠とをあわせた、二重の格の枠を持つ動詞であり、そのどちらの枠を選ぶかによって、表層の格の違い、つまり「代換」が起きるのであると述べている。

(4)　「塗る（付着変化動詞）」動詞の場合
　　a「移動動詞」；〈動作主、対象１、目標（Goal）〉
　　b「変化動詞」；〈動作主、対象２、始発、結果、手段〉

(5)　a 室内に光があふれる/満ちる。
　　b 室内が光であふれる/満ちる。

(6)　a 高速道路に車があふれる/満ちる。
　　b 高速道路が車であふれる/満ちる。

(7)　a タンクからオイルがあふれる。
　　b タンクが（？オイルで）あふれる。

((5)(6)(7)は、奥津（1981）p.50から引用）

本論文と深く関連のある「あふれる・満ちる」という動詞については、(5)(6)のような「～ニ～ガ」「～ガ～デ」代換、(7)のような「～カラ～ガ」「～ガ（～デ）」代換[7]の二様の代換がある、と述べている。

(5)(6)の例については、「或る空間に事物が入り込んで、その空間をいっぱいにする」という移入変化動詞の例としており、(7)の例については「その空間から事物が出てくる」という移出変化動詞の例としている。両タイプには、意味的な違いはあるものの、「移動」的な面においては共通している、としている。

次節では、奥津（1981）で述べられている「移入変化」という概念をめぐって検討を加え、その「移入変化」という概念の不完全さについて述べることにする。

### 1．2　問題提示

「あふれる」という動詞は、対応する他動詞が存在しないにも関わらず、代換が起こる。また、「あふれる」には、前述した(5)(6)の「AニBガ」「AガBデ」代換と(7)「AカラBガ」「Aガ（Bデ）」代換の以外にも、例(1)のように「AニBガ」「AガBニ」代換が存在する。

(1)　a 表情に喜びがあふれる。
　　b 表情が喜びにあふれる。

前述したとおり、奥津（1981）は、代換現象を「移動動詞」の格の枠と「変化動詞」の格の枠の二重格をあわせ持った動詞の表層格の違いであると、説明している。しかし、次の(8)のような例については、「移動変化」の格の枠では説明できない。

(8)　a 風呂に水があふれる。
　　b 風呂が水であふれる。

(8)a と b は、奥津（1981）の立場だと、「移動（移入）変化動詞」の代換構文になり、(8)a は、移動（移入）変化動詞文にあたり、(8)b は、（風呂の）状態変化動詞文になる、としている。

(8)a については、「あふれる」という動詞が、①「（ある場所から）風呂（のほう）にあふれ出る」または②「湯ぶねが水であふれんばかりになる」という二つの意味として解釈される。①の解釈の場合は、「ニ」格を奥津（1981）の「移動動詞」の格の枠、つまり「着点」として捉えられる。

しかし、②の解釈の場合は、どうであろうか。奥津（1981）は、②のような解釈の場合も「移入変化動詞」の格の枠で説明しているが、この場合の「風呂」については、むしろ「起点」的であると思われる。要するに②の場合は、「起点・着点」と「対象」を文の成分とする「移動」構文というより、「出現・発生」の場所と対象を成分とする「存在」構文に近いのではなかろうか。

前述した(1)のような文についても、「移入」の概念の不完全さのため、奥津（1981）の(4)の「移動変化動詞」の格の枠では説明することが困難である。

次節では、主に例(1)a、b のような文を中心にして、この代換現象の「位置づけ」及び、(1)と(2)のように同じ「あふれる」でも共起する名詞の種類によって許容度に差が生じることについて述べることにする。

## 2．「発生」と「移動変化」

### 2.1　「AニBガあふれる」における「発生」と「移動変化」

まず、問題になっている「あふれる」の意味的特徴について調べることにする。「あふれる」は、三つのタイプの読みが可能である。一つは、「（ある空間からある空間のほうに）事物がいっぱいになってこぼれ出る」のような読みである。もう一つは「ある空間が事物によっていっぱいになる、あふれんばかりである」のような読みであり、最後は

「人や物が入り切らずに外にはみ出る」のような（派生的）読みである。

(9)　a 風呂に水があふれる。

＊ b 風呂が水にあふれる。

c 風呂が水であふれる。

例(9) a の場合「（蛇口から）風呂の湯ぶねに水がこぼれ落ちてくる」という解釈がまず可能である。これは「水」の位置変化を表す読みであり、この場合の格構造は、［対象・（起点）・着点］[8]になる。この解釈の「風呂に」の意味役割は、「（あるところから水が移動し）風呂（湯ぶね）に（こぼれ落ちてくる）」の意味の「着点」である。

例(9) a は、また「いっぱいである/いっぱいになる/あふれんばかりである」の解釈も可能である。これは「水」の発生と「風呂」の状態変化を表す読みであり、この場合の格構造は［場所（location）・対象］である。この場所格は、ある状態が発生し存在する場所であり、この点「水」の位置変化による「起点・着点」と区別される。

この「発生の場所」の解釈と関連して例(10)と(11)も同じタイプではないかと思われる。

(10)第二楽章は、ソナタ形式をとり、《小川のほとりの情景》という標題と完全に一致して、小川の静かな流れを暗示するような、細かい動きが低音楽器にほとんど一貫して与えられている。そして、全体に喜ばしい感情があふれている。

〈ＣＤの解説書から引用〉

a 全体に喜ばしい感情があふれる。

b 全体が喜ばしい感情にあふれる。

＊ c 全体が喜ばしい感情であふれる。

(11)　a 目に涙があふれる。

＊ b 目が涙にあふれる。

c 目が涙であふれる。

(10) a の「ある空間（場所）に（才知・気力）感情などが満ちている」の解釈の場合は、物理的に物の存在する場所ではないが、「この空間の充満している状態」を示している。(10) a の場合、「事物の移動」的な解釈は不可能である。(11) a の場合は、具象的な「涙」の移動は可能なはずであるが、「目」においての移動は不可能なため、「発生の場所」の読みしかない。

(12)　a 道に群衆があふれる。

＊ b 道が群衆にあるれる。

c 道が群衆であふれる。

次は、例(12)について考えてみることにする。「人や物が入り切らずに外にはみ出る」の（派生的）解釈の場合であるが、例(12) a の「ニ」格にも「事物の移動」的な解釈より「発生の場所」的な読みが強い。(13) a と b を比べてみると、語用論的にその空間が「（あふれ出る）着点」があり得るのかどうかによって、発生の読みの度合いに差があるようである。

(13)　a 会場（に/から）人があふれる。

b 道（に/＊から）群衆があふれる。

まとめてみると、「あふれる」の場合、意味には「〜があふれてこぼれ落ちる」「いっぱいになる」の二種類がある。また、それぞれの意味に対応する格構造は［対象・着点(Goal)］［(存在の）場所・対象］になる。本稿では、前者を「移動変化タイプ」、後者を「発生タイプ］と区別する。

奥津（1981）においても「あふれる」の「移入変化動詞タイプ」(5)(6)に対して、「…その空間から外に出るというおもむきはあるが、必ずしも外に出ているとは言えない「〜ニ〜ガ」という場合は、やはり事物がその空間にとどまっていると解すべきであろう…」と述べているが、このタイプも移動タイプとして説明している。この点は、本稿の立場と異なる。

それでは、どうして「移動タイプ」と「発生タイプ」とを区別しなければならないか、について述べることにする。

### 2.1.1 発生タイプ（語順との関連から）

まず、(9)から(12)の各(a)の例文のほうが最も自然な文である。この(a)類（(9)〜(12)の各 a の例文：以下同じ）の「ニ格」の意味役割を調べるために、(a)類の語順だけを替えて見ると、次の例(14)のようになる。

(14) a 風呂に**水が**あふれる。（＝(9) a）
＊ b **水が**風呂にあふれる。

c 全体に**喜ばしい感情が**あふれる。（＝(10) a）
d **喜ばしい感情が**全体にあふれる。

e 目に**涙が**あふれる。（＝(11) a）
＊ f **涙が**目にあふれる。

g 道に**群衆が**あふれる。（＝(12) a）
＊ h **群衆が**道にあふれる。

例(14)の c と d の場合は、「(全体）ニ（喜ばしい感情）ガ〜」構文が「(喜ばしい感情）ガ（全体）ニ〜」構文に、語順が変わっても許容度があまり変わらない。しかし、同じ「あふれる」を述語とする文であっても、c と d に比べて、a、b と e、f と g、h の場合は許容度が下がる。b の場合は、水が位置変化する「移動変化タイプ」としては正常な文であるが、ここでは、発生タイプを問題にしているため、非文とした。(「発生タイプ」の読みが語順の変化によって「移動変化タイプ」の読みになりやすくなってしまうことに注意されたい)[9]

一般的に「存在文」は、場所を表す（「ニ格」）名詞句を文頭に置くのが基本的語順である、という指摘がある[10]。a、b と e、f、g と h の場合も、(許容度が下がる理由が)

「存在文」の場合と同じく「ニ格」として現れている名詞（「風呂に」、「目に」、「道に」）に「場所」的な意味役割が強く現れているからではないかと思う。例えば、⒁ｅの場合、「目」という場所において「涙があふれる」という事態が起こるという意味であって、⒁ｆのように語順が変わると、「＊涙が目にあふれる」というおかしな文になってしまう。

考えてみれば、前述したとおり発生タイプの「あふれる」の意味は、「こぼれるほどいっぱいになる、あふれんばかりである」という意味なので、この類の「ニ格」を「（具体的な）物がいっぱいである」場所的に捉えると、この「ニ格」に「（発生の）場所」の意味役割を認めて差し支えないと思う。

これとは対照的に、次の(1)ａとａ′、⒁ｃとｄの場合は、語順が変わっても内省に問題がない。

(1)ａ　表情に喜びがあふれる。

ａ′喜びが表情にあふれる。

この(1)ａ、ａ′⒁ａ、ｂにおいて注目されるのは、ガ格名詞が「抽象名詞」である点である。「～ニ（抽象名詞）ガ～」文の場合は、語順が変わっても「発生」の意味が保たれる。

### 2.1.2　「移動変化タイプ」

「あふれる」の「移動変化タイプ」に関しては、基本的に奥津（1981）の立場と同じであり、本稿では、深く立ち入らない。ただ、奥津（1981）で「移動変化タイプ」の代換として挙げている例(7)については、代換として認められない。奥津（1981）も(7)ｂについて「…「～ガ～デ」にすると、「オイル」は外にあふれ出ていなくてもよいように感じる…」といって、デ格名詞句を括弧を付けており、(7)ａの代換型は(7)ｂの「～ガ」しか取れないのだと主張している。

しかし、(7)ｂは、もっぱら「移動」の意味を表しているだけあって、「変化」の意味は含意しない。「変化」の意味がない文を代換型として認めることはできない。要するに「～ガ～デ」構文は、あくまでも「（発生による）変化」の意味を表しているのである。

こういう文の存在は、「発生タイプ」と「移動変化タイプ」とを区別する有効性を示していると言えるであろう。

## 2.2　「ＡガＢニあふれる」の文における「発生」と「移動変化」

次は、⑼から⒀の各(b)の例文（以下(b)類）を改めて⒂にまとめて示してみると、次のようになる。

⒂＊ａ風呂が水にあふれる。

ｂ全体が喜ばしい感情（夢・希望……）にあふれる。

＊ｃ目が涙にあふれる。

＊ｄ道が群衆にあふれる。

⒂の場合、注目されるのは、ｂとａ、ｃ、ｄの文としての許容度の違いであるが、こ

の違いは果たしてどこからもたらされるのであろうか。

一方、(9)から(12)の各(c)の例文（以下(c)類）を改めて(16)にまとめてみると、次のようになる。

(16)　a 風呂が水であふれる。

＊ b 全体が喜ばしい感情（夢・希望……）であふれる。

c 目が涙であふれる。

d 道が群衆であふれる。

まず、例(15)と(16)の意味を考えてみると、「水・感情・涙・群衆」等の移動によってもたらされる「風呂・全体・目・道路」等の変化、要するに「移動変化」的な解釈は考えられない。「発生変化」的な解釈しか考えられないのである。

また、(16)の場合、bとa、c、dの文としての許容度が、(15)とは全く反対になっている。(15)と(16)の許容度の違いは「ニ」格と「デ」格として現れる名詞が「抽象的」か「具象的」かという違いから生じるのではないかと思われる。「あふれる」は、動詞の語彙的な特徴として「働きかけ」性を持たずに、何らかによって対象の状態に変化が起こる、という側面をもっている。しかも自動詞なので、「あふれる」状態をもたらすその「要因」が文の成分として現れる際に、「具象性」の度合いが高いほうが「デ」格として現れると考えられる。[11]また、(15) b の場合、「抽象名詞ニ」のほうは、抽象性のため「具体的な物の移動」のような解釈は難しく、発生タイプとして解釈されやすいのではなかろうか。

次は、例(15)と(16)における「ニ格」と「デ格」の意味役割について考えることにしたい。前にも少し触れたが、「Aガ**Bニ/デ**あふれる」という文における「Bニ/デ」という成分は、「Aガあふれる」という状態変化を引き起こす「要因」もしくは「原因」の意味を表し、「ニ格」として現れるのか「デ格」として現れるのか、という違いは、「ニ格」もしくは「デ格」と共起する名詞が「具象名詞」か「抽象名詞」かによって違う、ということを述べた。

しかし、これで問題がないわけではない。

(17)＊ a 水で風呂があふれる。

＊ b 喜ばしい感情に全体があふれる。

＊ c 涙で目があふれる。

＊ d 群衆で道があふれる。

もし、これらの「ニ格」や「デ格」が「原因」格であれば、語順の変化に対して別に影響がないはずだが、(17)の文をみると、かなり許容度が落ちる。このような理由で、本稿では、例(15)と(16)に現れる「ニ格」や「デ格」を典型的な原因格とは区別し、「原因（構成物・contents）」と呼ぶことにする[12]。

### 2.3 結　論

「あふれる」を述語とする文の「AニBガあふれる」構文は「発生」か「移動変化」の解釈が可能である。「AニBガあふれる」構文の「に」格は、「発生タイプ」の場合「（あ

る状態が発生し存在する）場所」の意味役割を果たし（「場所**ニ**対象**ガ**～」）、「移動変化タイプ」の場合「（移動する）起点・着点」の意味役割を果たす。また、対象の「ガ格」名詞が抽象的意味の名詞の場合は、「AニBガあふれる」構文と「AガBニあふれる」との代換（hypallage）が起こる。この際、「AガBニあふれる」の「に」格名詞は、原因（構成物）の意味役割が強くなる（「対象**ガ**原因（構成物）**ニ**あふれる」）。これに対して、「ガ格」名詞が具象的な名詞の場合は、「AニBガあふれる」構文が「対象**ガ**（原因（構成物）**デ**）～」との代換が起こる。この際の「デ格」名詞句の意味役割が原因（構成物）であることは言うまでもない。

結論的に、問題の代換は、次のようにまとめられる。

**あふれる型の代換**

〈発生タイプ〉

「発生場所**ニ**発生物**ガ** Verb」←→「対象**ガ**抽象名詞**ニ** Verb」
（場所）（対象）　　（原因（構成物））

「発生場所**ニ**発生物**ガ** Verb」←→「対象**ガ**具象名詞**デ** Verb」
（場所）（対象）　　（原因（構成物））

〈移動変化タイプ〉

「移動場所**ニ**　移動物**ガ** Verb」←→ない
（起点・着点）（対象）

## 3．今後の課題

本稿では、「あふれる」という動詞を中心に、「AニBガあふれる」という構文と「AガBニあふれる」という構文との関係を代換現象として捉え検討を加えた。結論として、「移動変化タイプ」においては代換現象は起こらなく、「発生タイプ」において二様の代換現象が認められること、そして各々の名詞句の意味役割について述べた。

ただ、本稿では「AガBニあふれる」という構文において「Bニ/デ」を「原因（構成物）」であると述べたが、具体的にどういう性質のものであるについて、論を改めて論じたいと思う。

(1)ここで言う「代換における同義性」というのは、いわゆる知的意味（cognitive meaning）について言うのであって、「話者の視点・久野（1978）」あるいは「焦点化（focusing）、前景化（perspectivization）・Fillmore（1977）」を考えると、二文が全くの同義というわけではない。

(2)本稿では、國廣（1966）と奥津（1980）に従い、「代換」について次のような立場をとる。

「代換」とは、

①構文的には、二つの文の間に、「格の交替」が起こり、一方がより自然ではあるが、どちらも文法的で

あり、

②二つの文の知的意味（cognitive meaning）が同じ、文のことを言う。

(3)Kageyama（1980）はこの代換現象を格文法的な立場から、表層格の違いを深層格の違いから来るものと考え、二重の格を認めて、格の移動（Theme Transfer）で代換を説明する。具体的には、Kageyama（1980）p.55以下を参照されたい。

(4)奥津敬一郎（1980）（p.94～99）を参照されたい。

(5)國廣哲彌（1966）「英語「動詞＋目的語」構造の分析」

（國廣哲彌（1970）『意味の諸相』p.197～204参照）

國廣氏は、英語の他動詞構文構造の分析の中で、授受動詞（「give」類）等を例にして「表層格の交替が可能なもの」を代換として取りあげている。

(6)奥津敬一郎（1981）（p.左21～左33）を参照されたい。

(7)具体的な内容は、奥津（1981）p.左31からを参照されたい。

(8)対象（theme）・起点（source）・着点（goal）

(9)(14) f の場合は、語順が変わっても「移動タイプ」の読みは出てこないが、これは「目」を「涙」が落ちてくる着点として捉えることが物理的に不可能だからであろう。

(10)久野（1973）p.265～280参照

久野は、存在文の基本語順が「L（場所）S（主語）V（述語）」であることについて、四つの証拠を挙げて論じている。その中に、「LSV の語順が文法的であり、SLV の語順で非文法的な文型がある」、という指摘がある。

例a　車内に居眠りをしている乗客があった。

？？a′居眠りをしている乗客が車内にあった。

b　一年に365日ある。

＊b′365日一年にある。

c 昔々あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。

＊c′昔々おじいさんとおばあさんがあるところにありました。

(11)山梨(1994)では、「具格性」と「原因性」を連続的に捉えており、その格解釈の認知的視点として［Concrete, Alienable, Manipulable, Controllable, Reponsible］の五つの基準を提示している。このうち、［＋具象性］ほど具格性が強くなる、といっている。

(12)「AガBニ/デあふれる」の文における「ニ格」や「デ格」の意味役割（「原因（構成物）格」）と典型的な原因格とは、どういう違いがあるか、については別稿を準備している。

**参考文献**


| | | | |
|---|---|---|---|
| 國廣哲彌 | 1970 | 『意味の諸相』 | 三省堂 |
| 久野　暲 | 1973 | 『日本文法研究』 | 大修館書店 |
| ――― | 1978 | 『談話の文法』 | 大修館書店 |
| 奥津敬一郎 | 1980 | 「動詞文型の比較」 | |
| | | 『日英比較講座　第２巻　文法』國廣哲彌編 | 大修館書店 |
| ――― | 1981 | 「移動変化動詞文―いわゆる spray paint hypallage について―」 | |
| | | 『国語学　127』 | 国語学会 |
| 言語学研究会 | 1983 | 『日本語文法・連語論（資料編）』 | むぎ書房 |
| 山梨正明 | 1987 | 「深層格の核と周辺―日本語の格助詞からの一考察―」 | |
| | | 『言語学の視界』小泉保教授還暦記念論文集 | ㈱大学書林 |
| ――― | 1993 | 「格の複合スキーマモデル―格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」 | |
| | | 『日本語の格をめぐって』仁田義雄編 | くろしお出版 |
| ――― | 1994 | 「日常言語の認知モデル」 | |
| | | 『言語』連載論文　1994．1月～1994.12月 | |

———　1995　『認知文法論』　ひつじ書房
矢澤真人　1992　「格の階層と修飾の階層」
『文芸言語研究　言語編』21　筑波大学
———　1994　「「格」と階層」
『森野宗明教授退官記念論集　言語・文学・国語教育』　三省堂

Fillmore, C. J.　1968　"The Case for Case." in E. Bach & R. T. Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory.*
New York : Holt, Rinehart & Winston
Fillmore, C. J.　1977　"The Case for Case" in Reopened, Cole and Sadock (eds) *Syntax and Semantics* 8, Academic Press
Kageyama, T.　1980　The Role of Themantic Relation in the Spray Paint Hypallage
*Papers in Japanese Linguistics 7*

**追記**　本稿は平成七年、筑波大学文芸・言語研究科に提出した修士論文の一部の内容に手を加えたものである。この過程で、数多くの方から御助言をいただいた。特に、矢澤真人先生には、最初から最後までご懇切なご指導を賜った。ここに厚くお礼を申し上げる。

（アン　ピョンホ　　筑波大学大学院　博士課程文芸・言語研究科　日本語学）